

【取材用下書き】昭和世代とZ世代の価値観の違いによる衝突

1 世代間の衝突の実態と課題

昭和世代でも50年前に新入社員だったころ、頭から尾まで過保護のアンコがギッシリの「たいやきクン型」と上の世代から評されていた。今日の「根性がない」と評されるZ世代と比べても、どっちもどっちという気がしないでもない。

そもそも、これまでの価値を背負って生きてきた古い世代と、新しい価値を背負って生きていく新しい世代とで、価値を共有するなどということは、至難の業に近い。だが、よくよく考えてみれば、究極的には運命共同体ともいべき企業や家族などにおいては、何かしらの共有する価値に向かって協働することが必須条件になる。共存しているだけでは、課題は解決できないのである。

ところが、その共同性が実感できない今日、家族でも、社会でも、世代間戦争が深刻なものになりつつある。社会保障費を払っている現役世代は、現在の年金生活者が基金を食いつぶして、今の若い自分たちの老後には保証が行き届かないことを不安、不満に思っている。一方、現在の年金生活者は、今日の支給額水準では満足な生活ができないと思っている。不思議なのは、このような今日の厳しい状況は、担当者ならとうの昔に予測できたはずであり、世代間戦争になる前に、そもそもそこでの設計の不備に責任追及の矢が放たれなかったことだ。今日の状況を予測できていたはずの担当者は、責任をとらされることなく、任期を全うしてしまっているはず。社会という運命共同体を考えた場合、世代間戦争は不毛な戦いと言わざるを得ない。

また、少子化の危機が叫ばれたころの話だが、ある県の青少年育成国民運動の大会に講師として参加したとき、私は休憩時間にロビーで、参加者の青少年育成指導者から次のような問いかけを受けた。「先生は、女子学生に対して、子どもを産むのはいやだななどというわがままをいわずに、子どもを産むよう教育していますか」。その参加者は、女子学生にはいわば「いやでも」子どもを産むよう教育することは、すべての教育者にとっての重要な役割だというのである。

たしかにタイパ、コスパの面から、出産、子育てを忌避する傾向があるとすれば、いくら子育て支援を手厚くしたところで、少子高齢社会の本質的解決は望めないと考えられる。子育て支援とは、出産・子育てに向かおうとする者、すでに向かっている者に行われる支援であって、子を産み育てる意欲が女子学生に欠けているとしたら、それは支援以前の本質的問題であることは明らかである。ここに、「教育」が「支援」以上に期待される理由があるといえる。

しかし、そのようにして行われる「教育」が、まったく効果をもたないまま、青年期としての女子学生とのすれ違いを繰り返す危険性を私は指摘しておきたい。「社会の存続のため」という名目のもとに、いわば「苦行」としての子産み・子育てを古い世代が新しい世代に強制するとしたら、その「衝突」の不当性、不毛性は明らかである。

事実、当時勤めていた大学で、100人程度の女子学生にその参加者の言葉を伝えたところ、ほとんどの者は「失礼な話」という反応であった。「子どもを産むか産まないかは自己決定の問題」、そして「私たちに出産を押しつけるよりも、私たちが安心して子どもを産み、楽しく子育てできる社会にすべき」というのである。その論旨も、また、正当なものであり、多くの少子化対策においても同様の言説が採られている。しかし、その言説には、社会に関わる主体としての自己認識の欠如の問題があることも指摘しておきたい。「私は、この状況の中でどうしたいのか」という自己決定の主体性が問われる。とくに、青年期としての女子学生においては、その多くが、将来の出産をめぐる、それが自己決定の個人的行為であることと、結果的には社会的行為にもなることとが、十分には統合できないまま引きずっていかねばならないという問題を抱えてい

る。

これは、「個人化と社会化の統合」という課題としてとらえることができる。ここで、個人化とは「個人としての充実」を、社会化とは「社会の一員としての充実」としておきたい。女子学生は、出産、子育てに関して、この課題に直面することになる。

この課題は、社会的必要からの押しつけだけでは、学生とのすれ違いの繰り返しになるばかりで解決しない。出産、子育てという「大事業」を間近に控える学生に対して、内面化としての社会化を図り、「個人化と社会化の統合」を促進することが必要である。

ここに、女子教育の象徴的課題が表れていると考える。そして、そこでは、社会化作用が、「押しつけ」ではなく、望ましい自己決定能力の獲得、すなわち、社会化と統合的に行われる個人化の「支援」として行われるという点で、教育のあるべき方法を示すものといえる。

先述の学生の反応のなかで、「失礼な話だと私も思う。でも、私が子どもを産んだら、社会に不満ばかり言って自分は何もしないというのではなく、自分のできる範囲で子育てしやすい社会にするために関わりたい」と記述した者がいた。この記述を、社会の構成員として「自分のできること、すべきことはする」という「協働」とおして、社会に「参画」することの必要性への気づきとして評価したい。

2 Z世代理解の方法

若者理解のためには方法がある。それが実現できていないのはなぜか。若者を育成する立場の者が、とらえるべき点をとらえていない、あるいは、視野に入れていないのではないか。

私は半世紀近くのあいだ、若者支援に携わってきた。青年の家職員として、大学教員として、そして、大学教員退職後、中高生の居場所づくり指導員も勤めてきた。そこで感じてきたのは、現場で出会う若者たちを共感的に理解することの大切さと難しさである。

若者を見るためには独特の方法論がある。まずは個人差を見る必要がある。その前提の上で、第一に、青年期特有の不変の課題を見いだす。これは、育成者自身の青年期を振り返れば、それなりには理解できよう。第二に、時代の変化を見る。育成者も同時代を生きる者として、一定の理解はできよう。第三に、世代としての変化（コーホート効果と呼ぶ）を把握する。加齢及び時代の影響だけでなく、同年齢のときに同じ時代を経験してきた者としての共通する特徴を見いだすことができる。Z世代の場合は、生まれた時からインターネットやスマホが身近にある「デジタルネイティブ」の第一世代であり、SNSを活用したコミュニティ形成やタイパ重視が大きな特徴である。

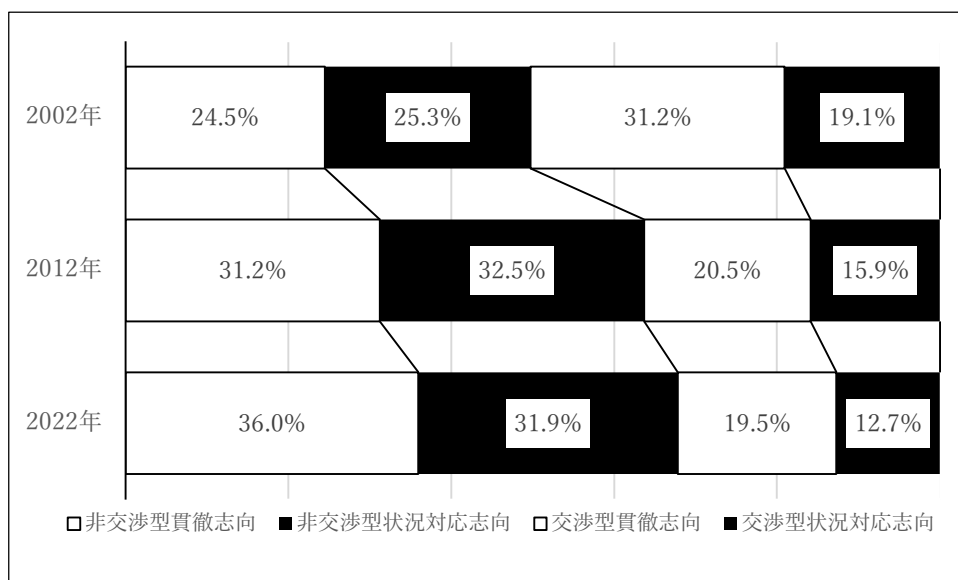
最近、教育の世界で盛んに言われているのが、「トランジション」（スムーズな移行）である。在学中の学修と「出口」の確保だけに追われ、新天地でのスムーズな移行と充実に関心が持てなかった状況が問題視されるようになってきた。在学中に「落ちこぼれない」のも重要だが、卒業して「school(群れ)から一匹で飛び出した」あとも、充実して生きていくための個人的能力、社会的能力が身についているかどうか目配りできるような育成が求められている。

このとき我々は、もう一つの「個の深み」としての「実存」にも目を向ける必要がある。泉谷閑示は、イソップ物語の勤勉なアリよりも音楽に親しむキリギリスを支持する。そして、ある程度社会的存在としての役割を果たした人間が、人生の後半に移りゆく地点で湧き上がってくる静かで深い問い、「私は果たして私らしく生きてきただろうか」といった、社会的存在を超えた一個の人間存在としての「実存的な問い」に向き合う苦悩を中年期の危機と呼ぶ。青年期には重要に思えた「社会的」とか「自己」といっ

たものが、必ずしも真の幸せにはつながらない「執着」の一種に過ぎなかったことを知り、一人の人間として「生きる意味」を問い始めるとし、また、今や青年期においても、そのような「実存的問い」が見られると言うのだ(泉谷閑示『仕事なんか生きがいにするなー生きる意味を再び考える』幻冬舎、2017年)。このような実存としての個人の深みや、カルチャーとしての充実は、あとに述べる「癒し」の意義や役割と通じるものである。そして、今日のある意味老成化したZ世代と、引退を控えた世代とが心情的に共感できる可能性を示していると考えられる。

3 意見対立を避けるZ世代

ここでは、われわれ青少年研究会(<http://jysg.jp>)が行った大都市における調査結果をもとに、青少年教育の視点から若者の傾向の変化について見てみたい。そのため、「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」、「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」の2つの設問のクロス集計の結果を、それぞれの肯定・否定によって、「交渉型」と「非交渉型」、「貫徹志向」と「状況対応志向」に分類して時系列で比較した。4タイプの時系列変化は次図のとおりである。



2022年の傾向は、Z世代の若者にはほぼ一致するといえよう。その新しい傾向は、非交渉型貫徹志向すなわち、友達と意見が合わなかったときにも「納得がいくまで話し合いはしない」が、「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」とするタイプが増加し、全体の1/3以上を占めるに至ったということである。

「非交渉型貫徹志向」について筆者が現代青年のディスコミュニケーションの象徴ではないかとコメントしたところ、ある学生が「そうではない。論破して相手を傷つけないから、話し合いをしないのだ」と反論のコメントを提出した。「あなたはあなたのみままでいいのだ」といういわば「個人化メッセージ」が浸透し、なおかつ自分とは異なる他者との対立を避ける「共存の作法」という、ある意味での「社会化」が進展している結果ととらえることができよう。しかし、企業や家族などの共同体において、意見対立を避けて共存するだけでは課題解決はできないのではないか。A対Bという意見対立は、時としてCという新しい価値の創造に結び付くことさえあるのに。

SNSで「親の愛は素晴らしい」という若者(友達の友達で見知らぬ人)の書き込みが

あったので、「そうですね。でも、子どもの自立の邪魔になることもあるよね」と軽い気持ちでレスを入れたところ、私に直接、「批判のレスを付けるのは、SNSのマナー違反だ」というメッセージがきたことがあった。私は彼の「怒り」を感じて驚き恐れて、投稿を削除した。「マナー違反」という言葉をふりかざして、自分の意見への批判を攻撃するという彼の心の内側を想像して、薄気味悪さを感じたのだ。

このような傾向は、「指摘されることをいやがる」という心情ともつながっている。「自分らしく生きる」ことが、「今のままの自分でよい」になってしまい、成長、発展への展望、願望を失ってしまう。さらにそのうえで、「社会的承認欲求」は不可欠というのだから厄介なことだ。これが、SNSなどでの小さなコミュニティでの閉鎖的な同調集団に彼らを追いやるのだろう。

3 Z世代への共感と協働

なんだかネガティブで暗い話になってしまった。だが、たとえ相手がZ世代の若者であっても、相手の成長を信じられないまま育成などできるわけがない。では、どうすればよいのか。

あの手この手がありそうだ。この手の話は、ネットやAIでいろいろ出てくるだろう。やってみる価値はある。

だが、私としては、次の点を指摘しておきたい。同じ価値観の友達がほしい、欠点を指摘されるのはいやだ、成長はよいが挫折は怖い、それでも社会的承認はほしい。これって、すべて、昭和世代にも当てはまることではないか。さらには、先に述べた社会的存在を超えた一個の人間存在としての「実存的な問い」も、おたがい引きずりながら生きている存在である。

だとしたら、「理解不能」などと言わず、自分自身も自己拡大するつもりで、Z世代の若者と付き合ったらどうだろうか。先ほどの「いやでも産め」などのけんか腰のアプローチは論外。そもそも教えられることは教えているか。的確な業務マニュアルは揃えてあるか。そのうえで、昭和世代の価値Aを彼らに伝承し、彼らの価値Bと戦い合わせて、新しい価値Cを創り出したい。これなくしては、持続可能な共同体などはできないと思う。